



「Refugees」誌 通巻134号より

故郷への道のり

THE FAIRI KURDS

フェイリ・クルド

故郷を追われ、国籍も失って

マリー・ヘレン・ヴァーネイ 著

「同じ神、愛しているのは同じ神なのに、なぜ祖国はわれわれに背を向けるのか」。ジャセム・モハメド・サルヘクは首を振り、黙りこんだ。思いを馳せるのは、故郷での生活や近くにそびえるザグロス山脈。山頂に雪がかかったその姿は雄大だが、それはジャセムがいるイランのアズナ難民キャンプと、四半世紀前

に彼を突き放した祖国イラク

とを隔てる巨大な壁となっている。
ジャセムはフェイリ・クルド人だ。祖先は、「肥沃な三日月地帯(チグリス・ユーフラテス川流域からシリアをへてナイル川流域にいたる半月地帯。オリエン特文明発祥の地となる豊かな農耕地帯)」で大きな富を築いたが、1970年代から80年代にサダム・フセインの独裁体制の犠牲になった。

この時期、あらゆる階層のマーシュ・アラブ人、クルド人、イスラム教シーア派と一部のスンニ派の市民、数百万人は激しい迫害を受け、自ら祖国イラクを捨てて離れるか、無理やり追い出された。なかでも、約30万人のフェイリ・クルド人の運命は特に悲劇的であった。彼らは家を失っただけでなく、故郷さえも失ったのだ。フェイリ・クルドは政府によって正式に国籍を奪われ、無国籍者という法的なよりどころのない世界に追いやられた。現在こうした無国籍者は彼ら以外に世界に約900万人いるとされている。

フセイン政権下では、ジャセムらフェイリ・クルドは微妙な立場にあった。イラクにいる400万人近くのクルド人の大半は、スンニ派で、イラク北部で生活している。一方、フェイリ・クルドはシーア派で、イラク中部の「フェイリ・トライアングル(三角地帯)」と呼ばれるバグダッドも含む地域に暮らし、長い間差別され不審の目にさらされてきた。

1924年のイラク国籍法は、宗教と民族に基づいて国民を3種類に分け、事実上の階級を作った。シーア派クルド人は一

番下の階級に位置づけられ、シーア派であるがゆえに、人口の大半がシーア派であるイランの出身者ではないかと、政府当局の標的にされてきた。

こうした嫌がらせにもかかわらず、ジャセムはイラクでの生活を楽しみ、自分の出自に疑問をもったことはなかった。彼は織物工場の経営者で、バグダッドでは伝説的なバザール(市場)を支配し、イラク全体の経済に大きな影響力をもつフェイリ・クルドたちとも密接な取引関係にあったからだ。

ジャセムも、そして彼の父親、祖父、曾祖父もバグダッドで生まれた。難民としての生活を送っている今も、彼はイラクの身分証明書を振り回して「これを見てくれ」と言った。そして若い男の写真を指差した。「これは、私だ。ここにバグダッド生まれだと書いてある」。さらに、白く長いあごひげをたくわえた老人の写真が貼り付けてある古びた黄色い紙切れを注意深く取り出した。それはジャセムの父親のイラクの身分証明書だった。

多難な前途

だが、当時イラクを支配していたバース党は、ジャセムの主張を認めなかった。1978年、貿易商業省から、工場経営を続けたいなら、イラク国籍であることを示す証拠を提出し、その国籍を登録せよとの通達が届いた。ジャセムの生活は突然危機にさらされることになった。

「通達によれば、祖父の代からイラク生まれだという証拠を提出しなければならなかった」と彼は振り返る。「そこで私は祖父、父、私の3代の出生地がバグダッドであることを示す必要な文書を手に入れました。貿易商業省に持って行ったら、役人たちは私の書類を見て『ここにお前はフェイリ・クルドだ』と書いてある。フェイリ・クルドなのか』と問うたのです。私が、そうですと答えると、『それならイラク人じゃない』と。そして彼は登録を拒否された。

79年、ジャセムの兄がイラク軍に徴兵された時の対応は違っていた。「兄はイラク人だ」という証拠を提出しろと言われ、自分はイラク人だが、フェイリ・クルドでもあると説明しました。すると軍の当局者は、『お前に関しては問題ない。お

UNHCR/M. VERNEY/DP/IRN - 2004



アズナ難民キャンプ内の学校

UNHCR/B. BOYER/CS/IRN - 1991



アズナ難民キャンプ

前はイラク人だ。だから従軍できる』と言ったのです。

一方ジャセムは、再びイラク人としての登録を拒否された。79年にイランでイスラム革命が起き、フセインはイラク国内のシーア派、とりわけ200万人のフェイリ・クルドがスンニ派中心の政府に対して問題を起こすのではないかと恐怖心を強めていたからだ。

80年4月4日午前1時、治安部隊がジャセムの家の玄関をたたいた。

ジャセムは、治安部隊の本部に連行され、尋問を受けた。

「出身はどこだ？」

「バグダッドです」

「なにがバグダッド出身なんだ。お前の身分証明書にはフェイリ・クルドだを書いてあるじゃないか」

「確かにフェイリ・クルドですが、出生地はバグダッドです。私はイラク人です」

「よくそんなことが言えるな。イラク人じゃない。お前はイラン出身だろう？」

ジャセムの妻、子ども、兄弟や姉妹も逮捕されトラックに押し込まれた。夜をついて走るトラックの行き先はわかるはずもない。「トラックが止まると、降りて歩けと怒鳴られました」とジャセムは振り返る。「目の前に高い山がそびえていたのでイラン国境に違いないと思い、『小さな子どもたちを抱えて、どうやってあの山を越えろというんです』と私は

聞きました」。

歩かなければ射ち殺されるだけだ、と兵士たちは答えた。そして「イランの宗教的指導者ホメイニに会ってくるがいい。お前はシーア派なんだから、あっちでイラン人と暮らせ」と言い放った。

国境を越えると、イラン兵士は困った顔をして一家を2〜3日の間テントで生活させた。その後、トラックでロレスターン州のアズナ難民キャンプに運ばれた。以来24年間、アズナがジャセムたちの家だ。

キャンプでの待遇は良かった。だがこの24年間の避難生活についてジャセムの口から出てきたのは、家に帰りたいたいという言葉だけだった。まるでこの24年間、再び故郷を見ることだけ考えてきたかのようなのだ。

夢見ることは忘れられない故郷の記憶

2003年初め、イランにはイラク難民が20万人以上いる。このうちアズナにいてるのは1300人で、その65%がフェイリ・クルドである。その多くは20歳未満の若者だが、キャンプで生まれ育った彼らはキャンプ以外の故郷を知らない。

彼らにとってイラクは、神話に出てくる国のようなものだ。男女共学の学校に行くと、壁にバグダッドとバザールの風景が描かれている。彼らは、一度も自分の目で見たことはないが、何度も話に聞かされているため、近くのアズナの町より



UNHCR/M.VERNEY/DP/IRN・2004



古いものだが貴重な身分証明書類。

UNHCR/M.VERNEY/DP/IRN・2004



結婚したばかりのアサムとゼイナブ。幸せな時を過ごしている。

も親しみを感じている。

だが、過去の思い出と未来の夢の板ばさみになっているのは子どもたちだけではない。ジャセムの息子アサムは、30年の人生のうち24年をキャンプで送ってきた。山道を無理矢理歩かせられてイランにきたのは6歳の時だから、バグダッドでの生活を鮮明に覚えている。

「僕は広い庭のある大きな家に住んでいました」と彼は言う。「父は赤い自転車をもっていて、時々私を後ろに乗せて工場に行き、いろいろな織物を見せてくれたのを覚えています」。

アサムも、父親やキャンプにいる多くのフェイリ・クルドと同じように、故郷に帰りたいと強く願っている。「私の国ですから」とアサムは言う。「私はイラク人です。数世紀も前の先祖たちがイランからやってきたからといって、私の過ちでしょうか」。

無国籍者という問題

世界の難民のほとんどは、アサムのように「故郷に帰る」という夢をもっており、UNHCRも自発的帰還は「好ましい」解決策であると考えている。しかし、これは一見簡単なように思われるが、破壊された村に学校や診療所を再建する必要性や地雷の脅威、「故郷にとどまった」人々との再統合といった難問にぶつかることが少なくない。

特に無国籍者の問題は複雑である。世界人権宣言は、「何人も国籍を持つ権利がある」としているが、世界には900万人もの無国籍者がいるとされている。

UNHCRは最近、192か国に働きかけ、この問題の実態について初めて包括的な調査を行った。その結果は、UNHCRと各国政府が無国籍者の問題に取り組むうえで役立つだろう。

今のところ、イランに滞在しているフェイリ・クルドの今後には期待がもてそうである。昨年、ヨルダンの首都アンマンでの会議で、UNHCRはフェイリ・クルドのような無国籍者の問題をイラクの新政府当局と緊急に検討する場が必要であると訴えた。これに対してイラク側は、フェイリ・クルドは帰還を認められるだろう、との見解を示した。

アズナ難民キャンプで生まれた20歳のゼイナブは言う。「どのフェイリ・クルドも同じ問題を抱えています。追放、強いられた移動、国籍の喪失……いろいろな言葉で語られますが、本質は同じです」。

昨年、ゼイナブとアサムは結婚し、アズナ難民キャンプの家の2軒隣りに引っ越した。ゼイナブはいま妊娠5か月である。彼女の夢は子どもが難民としてではなく、バグダッドの我が家で生まれることだ。そして「お前はイラク人ではない」などと二度と言われないようになることだ。